

## 「デジタル・シティズンシップ」を捉える

荒井 英治郎 (信州大学 学術研究院総合人間科学系)

### 1. はじめに

本稿は、2022年度に開講した教職科目(選択)「現代社会と教育問題」(2022年11月15日)の授業にオンラインゲストとしてご参加いただいたゲストティーチャー(今度珠美氏:鳥取県教育委員会デジタル・シティズンシップエドゥケーター)の講演内容を再構成したものである。記録作成に当たっては、山田海智さん、後藤友作さんに尽力いただいた。記して感謝を申し上げたい。

### 2. ゲストティーチャーの話

#### (1)自己紹介

【ゲスト】今日のテーマは「DC」です。コンピュータ1人1台時代を生きる子どもたちがどのようにコンピュータと付き合っていくのか、一緒に考えていきましょう。

私は2006年より鳥取県教育委員会の講師として情報教育、メディアリテラシー教育の授業実践、研修、講演等を行っています。また、2020年からは国際大学グローバルコミュニケーションセンターの客員研究員も勤めています。これまで情報モラルの授業実践、教材開発、書籍出版等を行ってきましたが、この16年間、文科省の教材や総務省のネットトラブル事例集の執筆等にも関わってきました。デジタル・シティズンシップ(以下、DC)を本格的に研究するようになったのは、2017年からです。

現在は研究者とともに日本デジタル・シティズンシップ教育研究会を立ち上げ、授

業実践の研究や教材開発等を行っています。

#### (2) 情報モラルとデジタル・シティズンシップ

【ゲスト】先日、日経のウェブ記事に「次期学習指導要領で、デジタル・シティズンシップ推進へ」という記事が出ました。ここでは、「デジタル社会では、デジタル・シティズンシップが備わっていることが前提であり、次期学習指導要領ではデジタル・シティズンシップ教育を各教科等で推進する方向性を明記。」と記されていました(令和4年6月2日:内閣府総合科学技術・イノベーション会議)。このように、DCがこの2年間で、国や全国の自治体から注目されるようになってきました。教育方針にDCを明記する自治体も急増しています。

しかし、様々な疑問を持つ方も多くいます。「また新しい考え方や新しい教育が導入されるのですか。もう新しいカタカナ用語

はいいのですけど」、「学問領域として、まだ認められてないのではないですか」、「情報モラルと何が違うのですか」、「情報モラルで十分カバーできるのではないですか」、「情報モラルを更新していったらいいのではないですか」など、たくさんの疑問をいただきます。今日はこういう疑問にもお答えをしていきたいと思っています。

まず、従来の「情報モラル」とは何が違うのか。「情報モラル」の定義は、「情報社会で適正な活動を行うための基になる考え方と態度」です。これは1999年告示の高等学校学習指導要領で新設された教科「情報」の中で示され、現在まで引き継がれている定義です。そして、その情報モラルの教材は、例えば、「自分を律し、適切に行動できる正しい判断力と、相手を思いやる心、ネットワークをより良くしようとする公共心を育てること」、「危険を回避し、安全に生活するための知識を身につけること」といったことを目指して作成されているものが多いです。

では、DCはどのような教育なのか。日本では、最近知られるようになりましたが、アメリカ、ヨーロッパでは広く実践され研究されている国際的にスタンダードなメディア教育です。また、DCは多くの論文が出されるなど、既に学問領域として確立しています。さらに国際工学教育学会がその定義を示していることから、デジタル・シティズンシップは学術用語でもあります。欧州評議会では「デジタル技術の利用を通じて、社会に積極的に関与し、参加する能力」と定義しています。

マイク・リブルが『学校リーダーのためのデジタル・シティズンシップハンドブック』を出版しました。そこでは、デジタル・シテ

ィズンシップ教育には9つの要素があることを示しており、メディアリテラシーと情報評価能力は5つ目の「デジタル・フルーエンシー」に含まれるとしています。そして、DC教育は、ICTの利活用が前提であり、心情ではなく安全かつ責任を持って行動するための理由と方法を学んでいくということ、それから、仕組みを理解するだけではなく、法的・倫理的にふるまうための能力とスキルを育成していく学びであるということも述べられています。

DC教育の実践に着目すると、特にアメリカでは熱心に行われていて、小学校2年生から高校3年生まで、年6回DCを学ぶカリキュラムが組まれています。日本の情報モラルは私の実感では各学校で授業されるのは年2回程度ではないかと思います。

ところで、このDCは、1990年代初期の頃にアメリカで誕生したと言われています。しかし、初期DCは、実は今とは少し違っていました。「インターネットには危険が潜んでいる。だから子どもを悪いものから遠ざけなければいけない」というように、リスク管理が重視されていたのです。しかし、いくら危険性を強調しても、子どもたちのトラブルは減らない。それどころか、子どもは日常的にインターネットを活用するようになっていく。こういった点を踏まえ、2010年以降はデジタルへの参加をメリットと捉え、ICTの良き使い手になるといった現在の学びへとアップデートされていきました。このようにDCは、社会情勢に合わせて、アップデートしてきた教育と言えます。

さらに2016年にはDCに「メディアリテラシー」が包摂されました。ここにも社会的背景があります。2016年はアメリカ大統領

領選挙がありトランプ大統領が誕生しました。そして、フェイクビジネスが生まれました。デマ情報を流すことが莫大な利益に繋がり、ビジネスとして成立してしまったのです。このような状況に対して、多くのメディア関係者や教育関係者が社会の分断や民主主義の根幹を揺るがしかねないと危惧し始めました。同じような思想や価値観の人とのみ対話する状況がインターネットで広がる中で、寛容さを学ぶ多様性や色々なあり方を議論する、そういう場面を教育現場で作ることが急務であると言われるようになり、DC にメディアリテラシーが包摂され、重要な位置を占めることになりました。

全米でメディアリテラシーのための条例を制定している「Media literacy Now」を設立したエリン・マクニールは、「メディアリテラシーと DC は教育政策において、どのような場合でもともに議論されるべきである」と述べています。このように DC は様々な必要な学問を取り入れながら更新されていますが、緻密な研究成果が反映されており、教育関係者だけではなく、メディア関係者も参入しながら議論されてきています。

DC は、次のような行動をするための手順と方法を学んでいくように進められています。「ネット上に残り続ける可能性のある個人情報や管理する情報の未来に渡る影響を意識して行動すること」、「ネットを介したコミュニケーションでは、ネットという公共の倫理、作法を意識して行動する力が必要であること」、「創造者としての責任を理解し、行動できること」。こういったことから、デジタル・シティズンシップは、「行動規範」と呼ばれています。ちなみに、先ほど情報モラルの定義をお伝えした中で、「情

報社会の基になる考え方と態度」とありましたが、DC は、考え方や態度を学ぶのではなく、行動するための手順と方法を学ぶ。ここが大きな違いとなります。ちなみに情報モラルは「心情規範」と言われることが多いですが、DC は「行動規範」と呼ばれます。このように、情報モラルと DC は同じようなテーマを扱っていますが、異なる教育であることはご理解いただきたいと思います。DC は、市民社会に参加するスキル、社会の創り手の育成、つまり個人の安全な利用のための考え方や態度を学ぶのではなく、デジタルを扱う良き市民となるための学びです。市民社会に参加するスキルを学ぶ、どういった社会を目指すのか、目指す社会像を持っていることはとても重要です。

### (3) デジタル・シティズンシップ教育の実践

【ゲスト】では、実践のポイントをお伝えしていきます。DC の実践を語る上で欠かせないのは、『Common Sense Education』というハーバード大学大学院の Project Zero という研究機関が開発した教材です。

DC では、6 領域を学ぶカリキュラムが組まれています。メディアをバランスよく使うための約束を考えていく①「メディアバランス」や②「プライバシーとセキュリティ」、アクセス履歴などを考える③「デジタル足あととアイデンティティ」、そして、④「対人関係とコミュニケーション」、⑤「ネットいじめ、オンライントラブル」、⑥「ニュース・メディアリテラシー」。その伝え方や学び方は情報モラルとかなり違います。

実践には、次のポイントがあります。例え

ば、「ICT の利活用を前提とするということ」、「インターネットという公共のマナーを学ぶこと」。インターネットは公共空間ですから、公園とか図書館と同じように、公共での作法とか振る舞いがあるわけです。それから、シティズンシップは市民教育ですから、「価値観の違いという多様性を理解していくこと」。そして、「悪い結果だけを強調しないこと」、「個人は安全な利用のためだけに学ぶのではなく、人権と民主主義のための情報社会を構築する良き市民となるために学ぶ、市民教育であるということ」。これらが大きなポイントになります。

授業では「言葉を大切にすること」というポイントもあります。導入では、まず言葉の定義を行います。例えば、「メディアバランス」とはどのような意味か。その前に「メディア」とは何かを定義する。それからインターネットでの自分の振る舞いがどこまでの責任に繋がるかなどを学ぶ「責任のリング」という授業がありますが、まず責任とは何かを定義します。このように言葉をきちんと定義することは、とても大切なステップではないかと思えます。

それから「立ち止まる手順」を学んでいきます。授業では、たびたび「立ち止まる」という言葉が出てきます。インターネットでは私たちはすぐクリックしたり、反応したり、投稿したりなど、スピーディーに行動してしまうことが多いわけです。しかし、どんな場合においても、一旦立ち止まって考えることは非常に重要ですから、そのための手順と方法を学んでいくわけです。そして、授業の最後には、インターネットで行動するため、「立ち止まる」「考える」「相談する」という3つのステップが登場します。

例えば、小学校低学年の場合は、道路を渡るときと同じで、「何か困ったときや、何かするときは一旦一休みして、考えて、尋ねよう。大人の人に助けを求めよう」、小学校高学年や中学生の場合は、「困ったときは3つのステップを思い出してね。一旦立ち止まろう。そして考えて、相談しよう」という形で一緒に学んでいきます。このように DC はシンプルなキーワードが繰り返し登場しますから、子どもたちもインプットしやすいのではないかと思います。

DC を学ぶ目的である良きデジタル市民となるためには、①「落ち着いて内省する」、②「見通しを探究する」、③「事実と根拠を検討する」、④「可能な行動を想定する」、⑤「行動を起こす」といった5つの資質を育成することが大切であると伝えています。これはオンライン上での振る舞いに限りませんね。まさに DC が社会で生きていくための大切な資質、力を育成する学びであるということが理解いただけるのではないかなと思います。

さらに DC のもう1つの特徴は、学びを家庭と共有する点です。例えば、アメリカの教材『Common Sense Education』では、全てのカリキュラムに保護者向けのアクティビティが用意されています。子どもが学んだ後に家庭で保護者も同じように学べるカリキュラムが組まれています。これを見たとき、私も非常に驚きましたが、ぜひ日本でも行っていきたいと考えており、私たちが作成しているカリキュラムには保護者宛の文書を用意するなどして積極的に進めるようにしています。

このように DC は行動する方法を学んでいくように提案されています。良き情報社

会、人権が守られる民主的な社会を構築する良き市民となっていく。そのために、公共の倫理教育、市民教育として、私たち1人1人がどのような使い手になり、そして情報社会でどのように振る舞う必要があるのかを提案する、それがDCと言えるのではないかと思います。いつもDCは市民教育であるという点を強調しています。

DCには6つの領域のうち、今日は「メディアリテラシー」の教材の解説を行います。日本で「メディアリテラシー」というと、どうしても情報活用能力と結びつけ実践されたり、情報の真偽を見極める、偽情報を読みとくことを目指した教材が多いです。しかし、DCのメディアリテラシーは「人権教育」である点が大きな特徴です。

なぜ人権教育としてメディアリテラシーが提案されているかということ、背景に、DCにメディアリテラシーが包摂されるきっかけとなったこと、メディアが社会的分断や人種差別、人権侵害に繋がっていくものであることなどが関係しています。

DCのメディアリテラシーでは核となる5つの質問が用意されています。この5つの質問のバリエーションから学びが深められるように提案されています。5つの質問を見ていただくと、個人の感情や知識経験のバイアスがメディアの理解をどのように形成しているのかが、ご理解いただけるのではないかと思います。つまり、例えば「情報を正しく見極めましょうね」、「偽情報を読み解きましょうね」といくら伝えても、私たちにはバイアスがあり、そのバイアスを通して情報を見る限り、やはり正しく見極めることは難しいわけです。自分の価値観やこれまでの経験・思想を通して情報を見

ることは当然あるわけです。それでは、そのバイアスがメディアの理解をどのように形成していくのか、例えば、よく言われる「フィルターバブル」ですね。見たいものしか見ない状態や、「エコーチェンバー」と言われるような、自分と同じ考えばかりに共鳴し、自分の考えがどんどん強化されていく傾向があります。こういう状況を打破するためにもメディアリテラシーを学ぶことは必要なことと言えます。

では、5つの質問について説明します。最初の3つは、①「このメッセージは誰が作成したのですか」、②「私たちの注意を引くために、どのようなテクニックが使われていますか」、③「人々はこのメッセージをどのように解釈するでしょう」です。私たちがメディアのメッセージを解釈する際、私たちの背景や価値観、信念がどのように反映しているかを考えることが大切です。どんなメディアでも、どんな情報でも見る人の数だけ解釈があります。自分とは違う背景を持つ人が同じメッセージをどのように異なる解釈をするか、これを理解することはすごく大事です。

次の質問は、④「どのようなライフスタイル、価値観、視点が表現されていますか。あるいは欠けていますか」です。メディアの解釈やメッセージは様々な価値観や視点が埋め込まれています。特定の視点が欠落している場合、それはメッセージにどのような影響を与えるか。このように特定の固定概念や価値観、視点を強調することがあること、それによって何が見えなくなっていくかを議論するようにされています。

最後の質問は、⑤「このメッセージはなぜ送られているのですか」です。メッセージの

目的を探ることはとても大切なポイントです。このように、授業では5つの質問のバリエーションの中で、子どもたちがメディアを批判的に考えていけるように構成されています。デジタルニュースと情報源の信憑性や信頼性を特定し、人権に配慮し、思慮深いメディア創造者、消費者としての責任を持つためのスキルと気質が養えるように授業が構成されています。

#### (4) 授業カリキュラム

【ゲスト】では、具体的なカリキュラムの構成について説明します。

まず、小学校2年生では他人の仕事をどうやって評価するかを学んでいきます。インターネットで行動することが信用を与えることに繋がっていく、信用を与えることが、人の仕事に対する敬意の表れであることを理解し、他人の作った創造物などに対する正しい扱い方や向き合い方を学んでいくように構成されています。

小学校3年生ではどうして人はデジタル写真や動画を加工するのかを学んでいきます。例えば、メディアで提示される写真や動画は、改竄される可能性があることを理解・認識する。そしてどうして改竄されるのか、その理由を特定していく、そして改竄された写真や動画を分析する力を身に付けていく、こういったことを学んでいきます。

小学校4年生では、著作権も扱っていきます。小学校5年生では、オンラインニュースの読み方を学んでいきます。オンラインニュースは関係ない広告や記事もついたりします。そこにはどのような意味があるのか、ニュースを読む際に気をつける

べきことは何かを学びます。

小学校6年生になると、信頼できるニュースを読む、さらにニュースを読み解くための方法を学んでいきます。ここではフェイクニュースなども扱います。

中学1年では、フェアユース、中学2年生ではニュース速報について学んでいきます。どうして報道機関はニュースを、どこよりも早く速報したがるのか。ニュース速報を提示し、報道機関のあり方を理解していきます。そしてニュース速報を分析して、誤った情報や不完全な情報の手がかかりなども学んでいきます。中学3年生では、デマとフェイクを学びます。

高校1年生では、確証バイアスを学んでいきます。確証バイアスは、自分の支持する情報ばかりを集めて、自分の支持しない情報は見ないような傾向のことです。確証バイアスとは何かを定義し、それがなぜ起きて、そして自分の確証バイアスに挑戦するための戦略を練っていきます。

高校2年生になるとクリックベイトについて学びます。クリックベイトは、ネット上の虚偽や誇大的な広告です。このクリックベイトがフェイクニュースの拡散にどのように影響を与えているのかを理解する、そしてフェイクニュースや誤報と戦うことが誰の責任であるかを学んでいく。

そして、高校3年生になると、フィルターバブルを学んでいきます。フィルターバブルとは何か、どのように発生するのか、フィルターバブルの限界と欠点について考え、自分のフィルターバブルから脱出するための戦略を練っていきます。

(5) 家庭との連携

【ゲスト】今紹介したのは『Common Sense Education』の教材を踏まえたものですが、小学校低学年から高校3年生まで、毎年メディアリテラシーを学び、段階ごとに、学びが深められるように提案されています。

先ほども言いましたが、メディアリテラシーの教材には家庭でのアクティビティも用意されています。人権に配慮する社会を作るために、子どもたちが社会的課題に目を向けるために、家庭の協力が必要であることを繰り返し伝えていくことが大切です。例えば、日本では、保護者には、自分の子どもが危険な目に遭わないためにという視点で教えるのではなく、私たちの社会をどういう社会にしていくか、その1人となるために子どもたちを育成していく責任が私たち大人にあるということを伝えていきます。

さて、DCを日本でどのように育成していくかについてですが、階段を登るように段階的に育成していくことが大切です。年6回実施することは難しいですが、1人1台環境が整備されていますからその広がりに合わせて無理のない範囲で必要なテーマを導入していただけたらと考えています

例えば、年度初めには「やっぱりちょっと使い過ぎが心配だから、メディアバランスを学んでおこうかな」、さらにできることが広がってきたら、「対人関係のトラブルとかも生まれるかもしれないから、ネットいじめや対人関係を学ぼうかな」、さらに活動が広がってきたら、「ちょっとやらかし投稿とかもしちゃうかもしれないから、デジタル足跡やプライバシーを学ぼうかな」、そして、創造活動が広がってきたら、「メディアリテ

ラシーも必要かな」というイメージです。無理のない範囲でゆっくり学んでいただきたいですね。

ただ、DCは「行動規範」ですので、これまでの情報モラルのようにトラブルが起きたら学ぶという対処療法的な学びというよりは、彼らがこれから行動するときに必要な選択判断ができるように学ぶ視点は持っていただきたいと思います。現代社会で情報通信技術や情報機器を使わない選択肢はもはやありません。ですから、彼らが必要な学び、きちんと行動できるように学んでいくこと、必要なスキルや知識を身に付けていくことが必要なのではないかと思います。

一方、これまではどうしても抑制的な指導が多かったのではないかと思います。しかし、刃物と同じで、包丁は危険だから、子どもたちには使わせないなんて言わないですよ。使い方を学ぶことで、おいしい料理を作ることができ、周りを幸せにすることができるよう、安全に利用するスキルや知識、作法を学ぶことで可能性を広げ、良き使い手となることができるのではないかと思います。そして子どもたちがネットでトラブルを起こしたとき、いつもそばにいてあげることができませんから、子どもたちが正しい判断、選択ができるよう、その知識やスキルをしっかりと学んでいくことが必要ですし、子どもたちを立ち止まらせるのが、まさに知識ではないかと思います。いくら制限をかけても子どもたちはしたいことがあるとどんなことをしてもしようとする。でも、知識があれば立ち止まる。知識をもって立ち止まり、考え、そして行動することができるのではないかと思います。

DC教育とは、価値観の違い、多様性に配

慮し、検討していく学びであること、ネットという公共の作法や振る舞いをポジティブに学んでいく学びであること、人権と民主主義のための社会を作る、良き市民、良き使い手となるための学びであること、そして批判的思考と創造者としての責任を学ぶ、創造性の育成へとつなげる学びであることを、是非ご理解いただきたいと思います。

#### (6) 質疑応答

【参加者】 小学校低学年の子どもたちに対して、ネットの悪い側面だけでなくポジティブに、匿名性が高いネットのマナーを学んでもらう方法にはどのようなものがありますか。

【ゲスト】 アメリカの『Common Sense Education』の低学年の教材が何を教えているか、次の動画を見てみてください。この動画のように、インターネットは町みたいということを伝えて、インターネットは広がっている世界だよということを伝えながら、とても強調していることは「活用することで、君たちのできることが広がるね」「活用は広がっていくのだよ」とインターネットをととてもポジティブに捉えていることです。そして、「やりたいことがたくさんある。そういったあなたたちのやりたいということを叶えてくれる世界でもあるのだよ。だけど、そこで振る舞うためには、やっぱり守らなければいけない約束があるのだよ」ということで、①「まず大人に聞くこと」、②「話す相手は知ってる人だけ」、③「子どもが見てもいいところだけを見る」と3つの約束を伝えていましたよね。こういう風に

分かりやすい動画や例えで、子どもたちが歩む場所、そして行動する場所は公共の場所であること、それはあなたたちの可能性を広げる場所であること、ただ、やはりそこは公共だから守らなければいけないことがある点を伝えていきます。

【参加者】 今回のお話の中心は小学生から高校生までの教育方法でしたが、大人にも理解してもらう必要があると思いますが、いかがでしょうか。

【ゲスト】 私も大人がまずシティズンシップを学んでいく必要があると実感しています。人権研修等を担当することもあります。そこでは、「シティズンシップ」という視点で、例えば、メディアリテラシーを使う場合は、私たちにはバイアスがあり、バイアスを取り除いて見る力をつけていくことは、人権に配慮できる社会を作っていくために必要であるという話をしています。

【参加者】 DC に対する批判や懸念にはどのようなものがありますか。

【ゲスト】 まず負担感はとてもよく言われます。また、DC で子どもたちのトラブルを抑制できるのか、抑制できないならばやはり情報モラルが必要なのではないかということも言われます。また、カリキュラムに組み入れるときに、どういった教科領域で扱えるのか、学習指導要領ではどのように扱うのか、今後どうなっていくかもよく聞かれます。

まずトラブルに関して、これまでの情報モラルでトラブルが回避・抑制できていた



のかという甚だ疑問です。それ以前に先生方がそれだけ言えるほど、これまで情報モラルを実践してきたかという、なかなか難しいです。では、DCになったら、年に何回もカリキュラムを組めるかという、それはそれで難しいとも言われますが、そこは私たちもきちんと提案していかなければいけないと思っています。負担に関しては、実は実践していただくとわかりますが、子どもたちが議論する場面がとて多く、実践された先生方は非常に面白い、どんどんやっていきたいと言われる方が多いです。また、DCを実践したことで、他の教科の授業観や授業の方法なども変わってきたと言われる方も多数います。

【参加者】DC教育の担い手として、教職員に期待していますか。それとも専門団体に委託する方向が考えられますか。

【ゲスト】私たちとしては、これは学校で教員が行う授業だと考えています。これまでのように外部講師が入って話をしたり、一発授業をしたりして終わりというような学びでは決してありませんから、そこはしっかりとお伝えしていきたいと考えています。

【参加者】DC教育の時期と頻度についてお聞きします。今の時代は、小学校低学年から毎日のようにネットに触れている人たちがいると思います。また、本日の配布資料には、中学2年生で「ニュース速報にどう反応すべきか」を学ぶとありましたが、少し遅いのではないかと思います。頻度や時期について、どのように考えていますか。

【ゲスト】日本の学校は教えることが非常に多いです。ですから、例えば年6回DCを組み入れてくださいと提案してもなかなか難しいです。それはアメリカも同じで、日本ほどカリキュラムが詰め込まれているわけではありませんが、年6回実施するのは相当大変なことだと思います。メディア教育の重要性に鑑みれば、頻度が少ないと言われれば確かにそうかもしれません。ただ、これまでの情報モラルが年に1、2回程度だったことを考えて、私は教職員研修等の場では、少なくとも4回は実施していただきたいとお伝えしています。

それからニュースを読み解く内容が、中学生からでは遅いのではないかというご指摘ですが、カリキュラムの対象学年は参考であって、その学年にこれをしなければいけないということでもありません。ですから、アレンジして、他の学年で扱うことも当然できるようになっています。

ちなみに、私が小学校のメディアリテラシーで授業する場合は、小学校2年生で「テレビのCMの嘘を見抜こう」という授業をしたことがあります。テレビのCMはオーバーな表現や誇張された表現が多く含まれます。そういったものを見抜こうという教材を使いましたが、小学校低学年の子どもは、CMは本当のことを伝えていると思っている子が多いですから、批判的に見る、アダルトディスカウントの視点を持つことを目的にやってみたところ、十分授業ができました。

【参加者】高校では「情報」の免許を持っていない先生が多い状況にあります。専門性のない教員が授業で情報モラルの話をする

と、正しい知識が身に付かないのではないかと思います。教員の知識差という問題に関しては、どのようにお考えでしょうか。

【ゲスト】以前私が出版した『情報モラルの授業』の共著者は高校の情報の先生でした。彼のように情報モラルやメディア教育を研究している高校の情報教員は非常に少なく、そもそも免許を持っておらず、代用している先生も多いです。その中で、情報モラルがどのように扱われてきたかと言うと、実はあまり扱われていません。特に高校では外部講師に頼りきりだったり、授業をやっているなかったりということもあったようです。ですから、知識差を考えると、まずそこにすら至っていないというのが実感です。

さらにその情報モラルをDCにアップデートしていくとなると、先生に正しく伝えて頂けるかというとなかなか難しいです。

例えば、DCはディスカッションをする中で学んで考えていくわけですが、先生が一方的に喋って終わりの情報モラルと変わらない学びになってしまったら、何の意味もありません。ですから、先生方がきちんと実践できるように、私たちも提案したり、研修を行っていくことが責任であると考えています。まずは、小中学校でと考えていますが、高校の先生方にも実施していきたいと思っています。

【参加者】DC教育における家庭の連携という話がありましたが、今の自分たちの親や家族はネットに対するバイアスがある可能性も否定できないと思います。その中で家庭のアクティビティを行っていく場合、家庭や子どもによって姿勢はバラバラだと

と思いますが、教育者はどのようなアプローチをしていくことができるでしょうか。

【ゲスト】例えば、ワークシートに「おうちの方からひとこと」という欄を作って、保護者にコメントを書いてもらうようにしています。子どもが学んだことを保護者に伝えて、保護者が感想を書いてもらうのです。

それから、「おうちの方からひとこと」の下に「学びを生かそう」という欄を設けて、家の人にメディアバランスのインタビューを試みましようという取り組みをしています。つまり、家の人があるメディアをどのくらい使っているかを観察する内容になりますが、そうすると実は家の人でもスマホばかり見ていたり、メディア漬けになっていたりしていることが分かってきます。このように、子どもを通じて家庭で話題が広がっていくように工夫しています。